

和歌山

地域面3ページ

和歌山支局

〒640-8154 和歌山市六番丁5
和歌山第一生命ビル4階
TEL.073(431)1411
FAX.073(433)0650
wakayama@mainichi.co.jp

【通信機関】

橋本	0736(32)0063	新宮	0735(28)1751
海南	073(482)0675	御坊	0738(22)2511
湯浅	0737(62)2870	田辺	0739(26)1026

【広告問い合わせ】 073(423)9291
【購読問い合わせ】 0120-468012

マーク矢崎 10

木綿の産地だった泉大津市

絵と文・熱田親喜 題字・熱田秦華

熊野古道

みちくさ記

23

大府泉大津市はか物産業の拠点。当地のつての木綿産地で、織「織編館」(泉大津市 大津、熊取)が大産地

旭町)を訪ねた。

木綿栽培の歴史は、種が中国から輸入され、た室町・安土桃山時代から始まり、江戸時代にかけて盛んになった。特に泉州(堺、泉

となった理由は①気候(大津市)は、1843(天保14)年に279(針布)と紋紙(パンチ)が温暖で、木綿栽培に必要不可欠な干イワシなどの漁肥が豊富②木綿は麻織に比べて、当り保温性が高く、絹より多量に生産できる地となり、風呂敷地、然、加工・集荷の中心(大津)という真田織、女帯地などの織物産業が盛んだった。板原町にあるアツプデートの織物メーカーの深喜毛織本社工場を訪ねた。1887年創業の毛織物一貫生産の工場で、現在はカシミヤ服地の反物がメイン製品である。

現場に入って、原毛のわたづくり、カード機、自動紡績での糸の捻り掛け、精練染色、起毛の工程、さらには最終検査をご案内していただいた。

クリーンな工程の中で、ウールピンの中で汚れのないわたが綿雪のようにゆっくり降るさまを見ると、木綿畑にこんな気持ちよ

さを感じた。

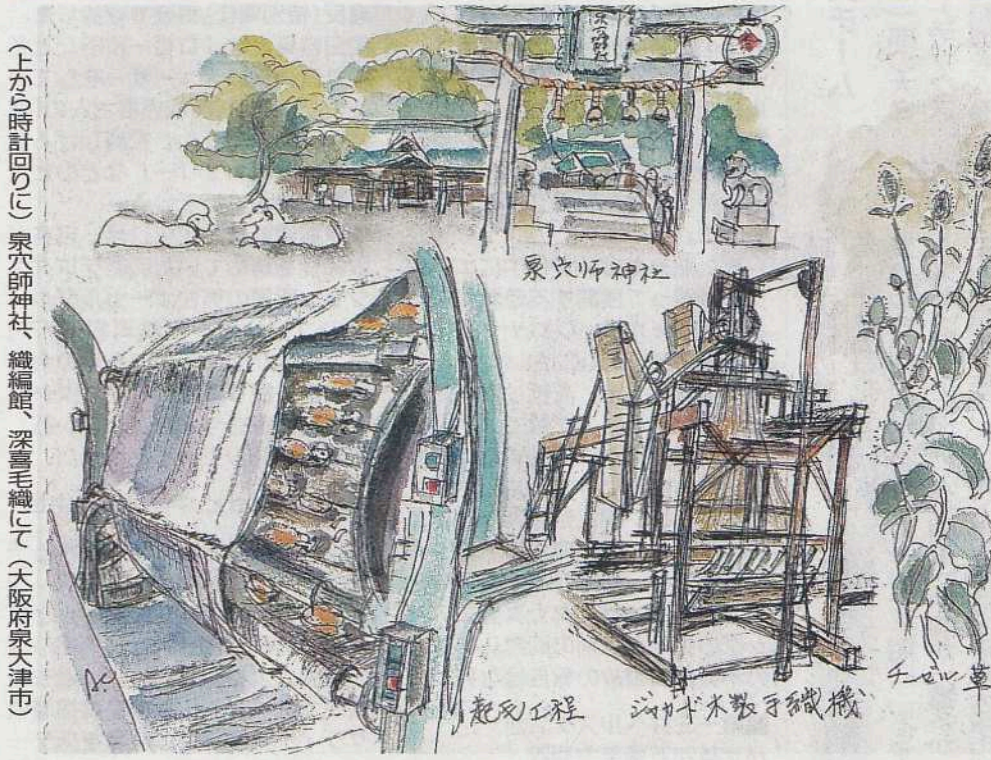
炎天下チーゼル草の爪立ちぬ 秦華 (次回は10月8日掲載)

紡織の神への信仰今も

戸時代の木綿農家は農繁期を除く10月から翌年5月ごろまでは男が莫仕事に精を出す一方、女は糸紡ぎから製織までの綿仕事で午後7時ごろから夜中まで働いた。1日1人、1反1反半反物を織き、戦後は多様化が進み、日常着、縞帯、夜間などに使われた。江戸後期には木綿紡織が産業化し、最も製織が盛んな宇多大津村(泉)

技術を生かした産業は、1887(明治20)年に牛毛毛布の生産が始まる。赤ゲット(フランケット)プームを経て明治、大正、昭和(戦中)と続いた。1日1人、1反1反半反物を織き、戦後は多様化が進み、日常着、縞帯、夜間などに使われた。江戸後期には木綿紡織が産業化し、最も製織が盛んな宇多大津村(泉)

師神社を訪ねた。社殿大修理のための寄進者幡奉賛会140社の掲示があり、紡織の神への信仰が今なお健在なことを知った。泉州の毛織産業の将来はまだ明るいと感じた。



(上から時計回りに) 泉穴師神社、織編館、深喜毛織にて (大府泉大津市)